

# 現代アートにおける動物問題

芸術学研究領域 美術教育

1319930 藤澤 穂奈美

現代アートは動物を求めている。

現代アートの表現手法は千差万別である。アーティストは彫刻表現、絵画表現などの古典技法の枠を超え、常に新しい表現を模索している。多様化するアート表現に用いられる素材もまた従来の固定概念に囚われず、森羅万象が素材として使用される。その中から筆者は「物質的素材としての動物」に着目した。

美術表現の素材としての動物といえばモチーフとしての役割が一般的に知られているが、今日のアートで素材として使用される動物は、動物それ自体の身体（命や肉体）が物質として作品に提供させられている。その利用方法は、生きている動物を利用する行為、死んだ（殺した）動物を利用する行為、展示空間で殺害する行為、とさまざまである。

これらの動物の利用はどれもが動物にとって苦痛やストレス伴うものであると推測できるが、人間は「表現の自由」という矛と盾で武装しているため、作品に動物の苦痛が伴う表現方法が存在していると筆者は考える。表現の自由が含みもつ道徳的、倫理的内容が明確化されていない事が1つの問題点である。しかしながら、道徳観や倫理観は個人の主観によるところが大きく、画一化できるものではないことも確かな問題点である。

日本国憲法でいうところの表現の自由は国際法においても非常に重要視されている。現代アート作品に見られる素材として動物を使用する潮流は、この「人間目線」の都合によって正当化されている。一方で、人間は他の生物を利用し、その命を犠牲にしなければ生きていけないという事実は明らかであり、全ての動物の犠牲を否定することは不可能である。他方で、そこに「残虐性」は必要ないと言える。動物に残虐性のある行為を人間がすることは自然なことでも不可避なことでもない。アート表現と称した動物に対する残虐性のある行為は虐待と相違なく十分に非難の余地がある。

筆者は動物的視座から現代アートを捉え直すことで見えてきた大きな問題点は残虐性の有無であると考え、そしてアートにおける動物利用を全面的に否定はせず、残虐性の排除という考え方を動物たちへ

の少しの救いの糸口としたい。我々は動物に対してその権利を認め、作品に利用する際に「残虐性を排除」した関わり方を持つべきであるという事が本論文における最大の主張である。

本論文は、人間の不羈奔放な表現行為に対して一石を投げ、人間が動物の権利を認める機運を高める。それは人間の麻痺した倫理観を取り戻すことで表現の自由における倫理的視野の拡大を目指すものである。序章では、本論文の研究対象を明瞭化する。肉食文化や伝統文化における動物の犠牲と現代アートにおける動物の犠牲とを区別する。また、博物館の動物の死や道具や材料としての動物の犠牲についても触れる。さらに、本論文で用いる「現代アート」という言葉の定義づけを行う。また、本研究は筆者がアーティストとして動物的視座から現代アートを考察するものであるということを示す。立ち位置を示す。

第1章では、動物の犠牲を伴うアート表現について具体的に国内外の作例を挙げ、現代アートにおける動物問題を整理する。動物的視座から眺める現代アートの問題点を詳らかにし、さらに日本国内と海外を比較して西洋の価値観を手がかりに参考作品の考察を深める。

第2章では、動物の基本的な能力について考察する。動物は肉体的・精神的苦痛を感じるのか。それらを細かく考察することによって動物への配慮の思想が必要であると明らかにする。

第3章では、第2章で得た見解を元に動物に権利を認めることと現代アートにおける残虐性の排除の意義と必要性を見出す。

第4章では、「動物法」と「表現の自由」について法律の知識を軸に、現代アートと動物の関係性を新たにする。

第5章では、アートワールドから残虐性を排除するために、私たちは支配の立場からの離脱を目指すべきであるとして「平等な配慮」の必要性について述べる。素材には力があり、それに敬意を表する態度が現代アートにおける動物問題に欠けていると指摘する。そして、アートには動物の存在が必要であると結論づける。

第6章では現代アートにおける動物問題の“これから”を考え、4つの理想を提唱する。代替可能性を探ること、動物との互惠関係の構築を目指すこと、功利主義的犠牲にも代替可能性を探ること、動物実験の基本指針である4Rをアートワールドにも取り入れるべきだということを述べ、現代アートにおける動物問題の向かうべき道を照らし出す。

第6章までの考察をもとに結章では、動物の権利を認め尊重する態度とすることと残虐性を排除することの重要性を訴える。そして、アートと動物の犠牲は不可分の関係であるという事実を改めて自覚し、動物を虐げるのではなく、コラボレーションすることでこれからも動物とアートを繋いでいってほしいとアーティストとアートワールドに投げかける。